

白川静のことば

《8》

眞 と 眞



金子都美絵・画

存在の奥にあつて、存在を存在たらしめるものを、莊子は真宰しんさいとよんでいる。それは時間と空間とを超えたものである。しかし人が時間と空間を超えるには、死によるほかに方法はない。眞(真)を『説文』(巻八、上)には、「僊人せんじんなり。形を變じて天に登るものなり」とし、字形を僊(仙)人がその姿を変えて隠れる意とするが、その字の上部の匕は化にして死、下は県けん、すなわち倒懸とうけんの首である。すでに化して髑髏どくろとなり、首髪が乱れ垂れている。もはや化することのなきもの、これが永遠なるもの、真なるものの実体である。

懸首を顛てんという。また顛倒して路傍に横死するものである。このような非命の横死者は暝いりを発して、おそるべき呪霊となるであろう。これを填うめ、祀屋を設けてこれを寛おくことは、すなわち鎮魂の礼である。人麻呂ひとまろが横死者のため多くの鎮魂歌を作っているのも、そのためである。真なるものとは顛死者であり、暝れる怨霊であり、これを填めて祀所に寛おき、慎つつしんで鎮いり弔あうべきものである。このおそるべき靈能が、真なるものであった。

『中国古代の文化』講談社学術文庫 P256～257)

